

国立公文書館 過去と未来の架け橋

国際公文書館会議 事務総長 ジョアン・ヴァン・アルバダ

日本の国立公文書館の菊池館長からこのセミナーに講演者としてお招きいただき、非常に光栄に存じます。

菊池館長、私は今回の館長のお招きを光栄に思っております。菊池館長はICA（国際公文書館会議）の第一副会長として、また世界中のアーキビストが参考するICAの年次会合である国際公文書館円卓会議（CITRA）の議長として、重要な役割を果たされておいでです。こうしてご招待いただき、皆様方からのおもてなしと、かけがえのない友情を再びお示しいただき嬉しく思います。

机の前でこの草稿を準備しながら、まだ十分に考察していない課題や提案事項がいくつもあることに私は気づきました。またこのテーマの大きさと、関連する未知の領域の多さに圧倒されるような気持ちになりました。しかし皆様を失望させることのないよう、また情報化社会の中で従来のアーカイブズが自らを変革してゆく方法と選択肢について熟考するために最善を尽くしたいと思います。

私の講演では、アーカイブズが今後も社会の中で重要な役割を担い続けるであろうこと、しかしながら、アーカイブズがその存在を過去と未来の架け橋として、そして専門的なアーカイブズ管理というものが、人類の持つ権利の一つとして認識され、適正かつ実証的なガバナンス実現の鍵となるためには、マーケティング戦略を変える必要があることを説明したいと思います。そしてもちろん、私たちの権利や義務、資格に関するデータ、個人としての私たちや社会の一員としての私たちに関するデータの公正かつ半永久的な管理についてお話しします。つまりアーカイブズは、私たち個人個人の記憶が自分自身にとって不可欠であるように、社会にとっても不可欠な記憶の保管庫として位置づけられることになります。

付け加えますと、アーカイブズの役割を的確にアピールするには、私たちは専門職として、また専門家として、自らの強みと弱点について、それも国際的な状況の中で議論しな

くてはなりません。アーカイブズは、地域もしくは国レベルでの関心事項でしかないように考えられることが少なくありません。しかし現在アーカイブズは劇的な変化の最中にあり、近い将来、いつどこからでも、誰もが参照できる資料となるでしょう。我々の産業も、我々の経済も、市民も、世界中で様々な責任を担っています。手法や規格も国際化が進められていますし、いずれは私たちの専門的な議論が国際的な議論に取り入れられ、それから利益を得るようになるでしょう。

そこでは是非、次の国際公文書館大会の日付を手帳に記しておいてください。2008年7月21日から28日までです。マレーシアのクアラルンプールで、マレーシア国立公文書館の主催で開かれます。大会は、意見や議論を継続し、見識を深めるための絶好の機会となりましょう。

話を進める前に、私たちそれぞれの立脚点を比較して、アーカイブズという皆様の概念が、私の意見を正しく理解していただくのに十分共通したものであるかどうかを確認したいと思います。

私たちは、「アーカイブズ」という語を、文脈に応じてアーカイブ文書や、文書館の建物、文書館サービスといったいろいろな意味として自由に使用しています。文書館の建物や文書館サービスは、世界のどこでもほぼ似通っているでしょうが、アーカイブズという概念は、とくに国際会議の場では多様な意味を持ちます。「アーカイブズ」が歴史的資料のみを指す文化もあれば、アーカイブ文書とすべての年代の記録全体を指す文化もあります。また口承の伝統をアーカイブズに含める文化もあれば、それらを除外する文化もあります。そこでアーカイブズについて議論する前に、話し手がこの語を使う際に何を意味しているのか明らかにする必要があります。

残念ながら、私は皆様の国のアーカイブ文書という概念に詳しくありません。ただしこうしたアーカイブ文書を作成し、保存する手順が似通っていることには確信があります。

文書、つまり私たちに馴染みのある紙の文書にはライフサイクルがあり、誕生から死、もしくはアーカイブズとしての永遠の生命へと移り変わる、というのが従来の考え方です。つまり文書は、デザインから作成、現用文書としての使用、半現用文書としての使用を経て、アーカイブズにおける恒久的保存もしくは破棄へと移行していくのです。

電子記録が大々的に導入された場合、すなわち「電子政府」が導入された場合、このような体制が存続できるのか、疑問に思っている人々もいます。電子政府にはこうした電子

的なデータへのアクセスとデータ保管に関する別のアプローチが必要である、というのが彼らの意見です。

アーキビストが、時や場所にかかわらずこれらを知的に管理するのに適した専門職として認められるようになることを望む人もいるでしょう。

ビジネスの世界で電子記録がいかに進化しようと、紙を使う記録の作成は続くでしょうし、アーカイブズでもこれらの紙記録の増大が止むことはないでしょう。

評価選別に関する議論も続いている 恒久的に保存すべき文書を効果的に選別するにはどうしたらよいか？ またどうしたらこのような手順を体系づけられるのか？ 評価選別はアーキビストにとって中核的な作業であり、業務記録の量が増大し、これらすべてを物理的に見ることがほぼ不可能になってしまった今日では、この作業も変わりつつあります。オーストラリアやカナダではとくに、アーキビストは、かつてのように記録の内容を評価するのではなく、その作成機関、より具体的にはその機能を評価し、中心となる特定の機関や機能の資料のみを保存するという手法を採用しています。結局アーカイブ・サービスが保存すべき記憶を選別する際には、機能の評価やサンプリング、手作業によるファイルもしくは項目ごとの選択など、多様な評価選別方法が用いられるのです。

国立公文書館の規模が大きくなればなるほど、特別な種類の記録やアーカイブズの保管を専門とする部署が発展する傾向が強まる、と考える人もいるでしょう。特別な種類の記録やアーカイブズとは、媒体（視聴覚媒体など） 製作者（国勢調査や公正証書など） 時期（中世のアーカイブズなど） あるいは用途（インターネット部門、学生部門、系図部門など）ごとに選別されたものです。特殊なニーズに対応し、できるだけ閲覧や調査に役立つためには、このような形で管理体系を整える方が簡単かもしれません。しかしそのような分野が専門化するとしても、すべての収蔵資料が同一の法体系にもとづいて管理されることが望ましいのです。

また私は、記録およびアーカイブズのいずれかの概念が該当するものの管理には、アーキビストが責任を負うのが良いと考えています。なぜ私がこれほどまでにこの点にこだわるのでしょうか？ これは私たちがこれまで学んできた教訓の結果です。ただこれらの教訓について触れる前に、別のテーマ、すなわち個人的なものか社会的なものかにかかわらず、記憶の機能についてお話ししたいと思います。

私たちには、いくつかの部分から構成される記憶があり、そのうちの短期的な記憶と長

期的な記憶は、記録（records）とアーカイブズになぞらえることができます。記憶は私たちの身体の一部であり、適切に保管されれば、身体の運命に従います。ただし私たちの大半は、自分の身体を、そして記憶を正しく保持するのがあまり上手ではないようです。

私の場合、大学生の頃はヘビー・スマーカーでした。車を猛スピードで飛ばすこともあります。お酒は今でも好きで、深酒はしませんが美味しく杯を重ねています。食べるのが好きなことも認めなくてはならないでしょう 少し食べ過ぎかもしれません。しかし実はこうしたすべての快楽が健康を危険にさらしており、私たちの記憶にも害を与える可能性があるのです。

肯定的な面を見れば、私たちの記憶は評価選別能力の恩恵を受けています。私たちは、記憶している情報を使い、見つけ出し、場所を移動させ、時には抑圧することもあります。また気分が良ければ、家族や友人たちと共有できる内容を、記憶の隠された部分から再構築することもあります。このような話の内容は楽しいこともありますけれども怖いこともあります。閲覧室でアーカイブズを読む研究者の活動のように、退屈なこともあります。



個人的な記憶の機能と社会的な記憶の機能の間にはほとんど違いはないため、このことをアーキビストの皆様に説明する必要はありません。

最大の違いは、人の確実な死が、比較的短期間の後に記憶を中断してしまうことでしょう。あるいは肉体には影響なくとも、私たちの記憶を徐々に、ないしは突然消し去ってしまう疾病的危険性です。社会的な記憶に関しては、洪水や地滑り、火災、そして更に悪いものとして戦争や内乱 また最近では民族浄化などを同等の類似例としてあげることができます。

適度に食べ、健康的な物を飲み、定期的に運動することで、肉体だけでなく記憶をも保持しているということをどれだけの人が認識しているでしょうか？ 実際、誰が記憶にメンテナンスが必要なことに気づいているでしょうか？ さほど多くはないと思います。私たちの多くは、空気や水と同じように、記憶も当たり前のものとしてとらえています。記憶も、空気のように無料です。しかし私たちは、きれいな空気や水に対しては、値段をつ

けることに慣れ始めてきています。これらはいずれも、少し前までは無料でした。水を汲んで持ち帰るには、井戸や川、運河、湖まで自分で歩いていくか、使いの者を出さなくしてはなりませんでしたが、空気は私たちのまわりのどこにでもありました。

値段をつけることで、あるいは希少性や怠慢などにより、私たちは空気や水を経済的な消耗品に変えてしまいました。物に値段をつけることの肯定的な意味は、大気汚染や水質汚染のように、それらを危険にさらすような状況や活動に対して注意を払うようになる点です。そのために価格が上がってしまうからです。

政府もこうした経済的な実状を認識しており、水や空気の経済的な利用に関心を強めています。しかし記録やアーカイブに関しては、まだこのようなアプローチは見られません。経済的、軍事的もしくは産業的なスパイ行為や、機密ファイルからの情報漏えいなどを除いては、情報の価値を認識している人などいません。映画や演劇の著者および製作者は、多くの場合、アーカイブズから入手した情報を商業的な利益を生む品に変換しています。今お話ししたように、政府はアーカイブズの価値に関心を示していません。政府の支出決定は、建物や設備、スタッフのコストによって決まります。

もうひとつの側面についても言わせてください。記録を作成し、保持するのは、いわゆる国の「体制」を含めたすべての市民です。彼らは書籍や絵画を購入します。その絵画を壁にかけて楽しんだり、他者を感動させるでしょう。あるいは書斎や居間の本棚に本を並べ、中身や装丁を楽しむでしょう。しかし記録に関しては、引き出しにしまったり、必要がなくなれば箱に入れて、記憶が作られた場所からは遠く離れたガレージや屋根裏部屋など、普段目に付かない場所にしまい込みます。絵画や書籍に対しては、家族と同じように注意を払うのに、記録やアーカイブズはあまり重視せず、自分の記憶と同じように当然のもので、無料で手に入ると思い込んでしまうのです。

しかし同じ市民や、とくに支配者層の人々は、たとえば出生証明書やパスポート、運転免許証、銀行カードなどの重要な個人情報が紛失し、すぐに再発行できなくなると、非常に動搖するでしょう。彼らは面倒な手続きに煩わされずに、紛失した記録を再生できるような関連ファイルが存在することを望むでしょう。もちろんこうした情報は存在します。私たちが現存する記憶から情報を生成するように、情報管理の専門家である私たちがこうした情報を存在させ、遅延なく利用できるようにしているのです。

記憶やアーカイブズに配慮することは、テクニックではなく精神の問題です。アーカイブズに対する配慮を高めるためには、関連当事者全員の精神構造に働きかける必要があります。

ます。現在の考え方を改め、各々の姿勢や行動を変える理由を説明しなくてはなりません。生活の質を大切にしたいなら、記憶についても配慮する必要があることを、人々に説明しなくてはならないのです。収蔵資料の価値に目を向けるよう社会に呼びかけ、社会に対して私たちのサービスがもたらす付加価値を明らかにすることから始めなくてはなりません。

正直なところ、現在の私にはこの問題に対する解決策がありません。しかしながら、私たちが力を合わせ、適切な行動計画をまとめ、実施すれば、解決のための政策や戦略を考案し成功させることができることは可能です。

いくつかのアーカイブズが、「ミッション・ステートメント（館の使命を記した趣意書）」を作成しています。このステートメントには、国の記憶（記録）を恒久的に保存する責任が明示されています。現代のステートメントは能動的言語で書かれ、「閲覧できるようにする」や「利用可能にする」などの表現だけでなく、「政府による適切な記録管理の推進」や「地域社会の認識を促す」などの表現も含むようになっています。すべての専門サービスにインターネットが導入され、バーチャル検索室が設けられれば、アーカイブズにとっても革命的な影響を与えるはずです。そして私たちもこうした革命的な影響を利用してゆかなくてはなりません。

ここで少し過去を振り返ってみましょう。皆様もご存知のように、統治という概念が誕生して以来、アーカイブズ = 記録資料は人類とともに歩んできました。しかし粘土板やパピルスなど、私たちが知っている最古の文書は、現在博物館や図書館に保管されています。アーカイブ文書は、時間の経過とともに、その関連するコンテクストを失った時点で、アーカイブズ = 記録資料として認識されなくなってしまうのです。もちろん私も、数千年前の当時の政権と今の政府にはほとんど何の関連性もないことや、後継各国の国境はそれぞれ異なり、過去の国々の国境とは似ても似つかないことを理解しています。文脈が破棄されると、アーカイブズ = 記録資料は考古学者が発掘して解釈する対象のモノとなり、私たちの祖先の武器や頭蓋骨とともに博物館の収納庫に納められるようになってしまいます。

電子革命やこれに続く新たな情報処理方法（作成方法、アクセスや保存、マイグレーションのための方法のいずれであっても）が、粘土板やパピルスを博物館の、あるいはせいぜい良くてガラスの陳列箱の中の展示物にしてしまったのと同じような影響力を及ぼすとしても、私は驚かないでしょう。今、粘土板やパピルスは、古い時代の記憶の一部となっています。皆様も私も、もはやこれらに触れたり、これらを参照することはできません。伝統的なアーカイブズ、すなわち電子文書を除くすべての文書は、現在の制度や使命を見直さないかぎり、同様の運命をたどるでしょう。

情報化社会、つまり電子情報社会において私たちが全面的な役割を担わないかぎり、また私たちの伝統的な役割に固執することで自らの存在を不動のものとしないかぎり、早晚私たちは博物館　　社会のペーパー・トレール（紙に残った記録）の博物館　　へと変わってしまい、他の機関が、社会の電子的記憶の保管者として、知的側面においても物理的側面においても、私たちに取って代わることになるでしょう。

私たちがこの業務に生き残りたいならば、ゲームのルール、すなわち無料で手に入るものは何もないという現在の競争社会のゲームのルールに則って、自らの役割を果たすことから始めなくてはなりません。

いくつかの意見をご紹介しておきましょう：

- ・インターネットで入手できない情報は、重要な情報とは見なされなくなる。
- ・タイム・イズ・マネー。本は読むより聞け。
- ・サービスは、24時間年中無休で利用できなければならない。
- ・私の家は私の城　　メディアがその人の世界を決定づける。
- ・私は絵が好きです　　DVDのコレクションがあれば、実際に行くよりもはるかに安価に世界中の美術館を巡ることができる。カラー・プリンタがあれば、好きな絵をリビングに飾ることができる。
- ・私は音楽が好きです　　もうコンサートに行く必要はない。好きな曲はすべてダウンロードできる。
- ・アーカイブズ？　　人工遺物のコレクションのことではないか？

プライバシーや閲覧に関する法律などの重要問題には触れることができませんでした。一部の領域では収束が進んでいますが、まだ差異は甚大です。ある人々にとっては個人情報であっても、他の人々にとっては公開情報であることもあります　　人生観や文化観が相反する影響を持つこともあります。

アーカイブズが重要であるという点については、意見は一致をみていると思いますが、私見ではまだその重要性の認識は十分ではありません。今の状況を改善していくための選択肢を見つけ出し、開発していくかは、私たちにかかっています　　この草稿がそうしたプロセスを促進するのに役立つよう望みます。

過去と未来の架け橋が崩壊することのないように、この情報化社会の中で私たち自身を変革してゆくことを皆様に提案して、結びの言葉といたします。

講演者紹介

ジョン・ヴァン・アルバダ氏 John Van Albada

(ICA事務総長)

1970年、フローニンゲン大学（オランダ）で社会経済史修士号取得。1973年、オランダ国立公文書館学校において文書館行政の修士号取得、同年ティルブルク市立公文書館長に就任。その後ヘルトゲンボッシュ市立公文書館長、ドルトレヒト市立公文書館長を歴任。1988年、ICA事務総長に就任し、グローバル化が進む新時代の公文書館が抱える諸問題に、精力的に取り組んでいる。現在、武力紛争や自然災害から文化遺産を守る活動を行う国際組織、国際ブルーシールド委員会（ICBS）の委員長を務める。

